

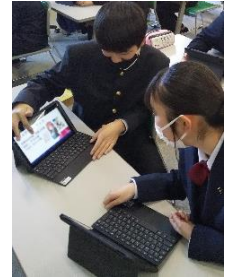


○「自立とは？(つづき)」

国立教育政策研究所の所長をされていた徳永保氏による講演「グローバル社会を生きる力をどう育むか」を聴く機会が10年ほど前にありました。

内容を、理解した範囲で言葉を変えたり足したりしながら要約すると…

企業が売り上げの大半を海外に求める時代であり、そのため世界の国々の間でグローバル人材の育成と人材獲得競争がおこなわれている。人材評価の国際化もすすんでおり、米の飛行機メーカーではグローバル人材の共通評価がすでに導入されている。国際バカロレア資格もこうした流れの一つである。



アメリカの大学での学びは実践的なものが多く、大学でどれだけスキルや能力を身につけたかが就職での採用基準となっている。一昔前の日本は、労働力の質の高さを、スキルや能力でなく学歴や勤勉性に求めている、世界的にも勤勉性が高く評価されてきた。実際は、若年人口が多く、玉石混交でもやっていける時代で、スキルや能力のある人が評価されてきた一面もあったと思われる。今は、国内に就職しても海外で働くのがあたりまえの時代である。そのため、実践力のあるグローバル人材の育成が求められている。見方を変えれば、人材育成をしっかりとしないと、少子化のため、玉石混交ではやっていけない時代でもある。しかし、企業には昔ほど人材育成にかかる体力がなく、学校教育でも育成が求められている。こうした情勢の中で、日本の子どもたちの表現力は上がってきているものの、子どもが少なく、まわりの大人が様子を気遣ってくれるので、コミュニケーション力や自己決定力が低下している現状がある。例えば、「お腹が痛いから保健室に行きます」と言わなくても、顔色見て先生が「大丈夫？」と言ってくれたり、「保健室行きなさい」と言ってもらえたりするのが今の子どもたち。体調が悪くて学校に行こうか迷っていても、親が「体調が悪そうだから学校に欠席の連絡を入れておくれ」と先走ってしまうことが多く、自己決定力がなくても過ごせてしまうのが今の状況。コミュニケーション力のないまま大人になると、親が会社に欠勤の連絡をする時代である。またこれに加えて子どものリアリティ(実体験)不足も関係しているのか、就職で重要視される論理的思考力やコミュニケーション力がないことを露呈する大学生が多くなっている。こうした状況の解決方法の一つとして、科学的根拠に基づく学習方法の研究である学習科学が注目されている。例えばある学校で、パソコンの文字を見せるのではなく、自筆の文字でプリントを配ることで、ミラーニューロンが刺激された例がある。ミラーニューロンとは、他人の考えていることがわかったり、他人と同じ気持ちにさせたりする脳内細胞のことである。ヘテロジニアス(異質なものを意識し提示することで、教育の本質である「まねぶ(真似る)＝学ぶ」ができるようになるのである。こうした学習科学の考えがこれからは重要となる。学習科学は、認知心理学や脳科学の知見を基礎にしつつ、効率的な学習のあり方などを研究する学問である一方で、学習者の主体的な取り組みを重視するものである…

このような内容でした。グローバル人材の育成をめざした国際バカロレアは、生徒の主体性を養う教育で、国際的視野を持つ人材の輩出をめざす国際的な教育プログラムとして、世界各国の大学入学資格を得ることができる国際バカロレア機構(本部:スイス)が提供するものです。鳥取県立倉吉東高校が山陰初の認定校に今年10月になったばかりです。

自立している人の特徴の一つに、頼まれたことだけをやるだけでなく、必要なことを自分で考えて主体的に行動できているかがあると思っています。それを磨くのが学習や部活動です…